



第6回

日本医師会

赤い賞

かかりつけ医たちの奮闘

受賞者紹介

主催 日本医師会／産経新聞社

特別協賛  太陽生命

日本医師会

赤ひげ大賞

目 次

- 3 第6回「日本医師会 赤ひげ大賞」概要
- 4 第6回 表彰式
- 5 祝辞(ビデオメッセージ) 内閣総理大臣 安倍 晋三
- 6 主催者挨拶 日本医師会 会長 横倉 義武
- 7 主催者挨拶 産経新聞社 代表取締役社長 飯塚 浩彦
- 8 協賛社挨拶 太陽生命保険株式会社 代表取締役社長 田中 勝英
- 9 祝辞

受賞者紹介

- 11 藤巻 幹夫 (新潟県 藤巻医院 理事)
- 16 河井 文健 (静岡県 河井医院 理事長・院長)
- 21 塚本 眞言 (岡山県 塚本内科医院 理事長・院長)
- 26 松原 奎一 (香川県 松原病院 理事長)
- 31 水上 忠弘 (佐賀県 水上医院 理事長・院長)
- 36 選考委員特別賞 鎌田 真人 (宮城県 歌津八番クリニック 理事長・院長)
- 37 選考委員特別賞 佐藤 徹 (宮城県 佐藤徹内科クリニック 理事長・院長)
- 38 選考講評 日本医師会 常任理事 道永 麻里
- 39 第7回「日本医師会 赤ひげ大賞」推薦概要

第6回「日本医師会 赤ひげ大賞」概要

「日本医師会 赤ひげ大賞」は、公益社団法人日本医師会と産経新聞社が主催し、「地域の医療現場で長年にわたり、健康を中心に地域住民の生活を支えている医師にスポットを当てて顕彰すること」を目的として、厚生労働省、フジテレビジョン、BSフジの後援の下、平成24年に創設(第6回より太陽生命保険株式会社が特別協賛)されました。各都道府県医師会から候補者を推薦していただき、選考委員の厳正な協議を経て、第6回「日本医師会 赤ひげ大賞」の受賞者5名と選考委員特別賞2名が決定しました。

主 催	日本医師会、産経新聞社
後 援	厚生労働省、フジテレビジョン、BSフジ
特別協賛	太陽生命保険株式会社
対 象 者	病を診るだけではなく、地域に根付き、その地域のかかりつけ医として、生命の誕生から看取りまで、さまざまな場面で住民の疾病予防や健康の保持増進に努めている医師。日本医師会の会員及び都道府県医師会の会員で現役の医師(ただし、現職の日医・都道府県医師会役員は除く)。
推薦方法	本賞受賞にふさわしいと思われる方(原則1名以上2名以内)を各都道府県医師会長が推薦

選考委員	羽毛田 信吾(昭和館館長、宮内庁参与)
	向井 千秋 (宇宙航空研究開発機構技術参与、東京理科大学特任副学長)
	檀 ふみ (女優)
	ロバート・キャンベル(国文学研究資料館長)
	武田 俊彦 (厚生労働省医政局長)
	今村 定臣 (日本医師会常任理事)
	道永 麻里 (日本医師会常任理事)
	松本 肇 (産経新聞社取締役)
	河合 雅司 (産経新聞社論説委員)

第6回 表彰式



地域で献身的な医療活動に取り組む医師を顕彰する第6回「日本医師会 赤ひげ大賞」の表彰式とレセプションが平成30年2月9日、東京都内で開かれた。安倍晋三首相もビデオメッセージを寄せ、「住民の健康を守ろうという崇高な使命感と行動力は、現代の赤ひげ先生だ」とたたえた。

表彰式で日本医師会の横倉義武会長は「明るい高齢社会にするためにも、住民に寄り添う全国の赤ひげ先生が大切だ」とあいさつ。産経新聞社の飯塚浩彦社長は「地域の信頼を得ながら住民の生活を支えてきた方ばかり」と受賞者をたたえた。

表彰式後に行われたレセプションでは、後援する厚生労働省の加藤勝信大臣、今回より特別協賛の太陽生命保険の田中勝英社長、選考委員の羽毛田信吾氏、檀ふみ氏、ロバート・キャンベル氏が受賞者を祝福した。

第6回受賞者は、^{ふじまきみき お}藤巻幹夫医師（新潟）▽^{かわ い ふみたけ}河井文健医師（静岡）▽^{つかもと まこと}塚本眞言医師（岡山）▽^{まつばらけい}松原奎一医師（香川）▽^{みずかみただひろ}水上忠弘医師（佐賀）に加え、宮城県の^{かまた まさと}鎌田眞人医師と^{さとうとある}佐藤徹医師が選考委員特別賞を受賞した。



本日、栄えある「日本医師会 赤ひげ大賞」を受賞された皆様、および選考委員特別賞を受賞された皆様、誠におめでとうございます。また、支えてこられたご家族の皆様にも心からお祝いを申し上げます。

「日本医師会 赤ひげ大賞」は、住民に最も近い存在として重要な役割を果たしている医師の取り組みに光を当てることにより、地域医療の発展に大きく寄与してきたと考えております。

今回受賞されたのは、過疎化や高齢化が進む地域で長年住民の皆様の健康を守ってこられた方々、救急医療に尽力してこられた方、中学校校医として子供の生活習慣病予防に取り組んでこられた方、東日本大震災後の地域医療の確保に尽力された方々と伺っております。

住民の健康を守ろうという皆様の崇高な使命感と行動力は、まさに現代の「赤ひげ先生」であると思います。皆様の受賞は、全国津々浦々で地域医療に携わっていらっしゃる医師の方々の励みとなるものです。

私は、少子高齢化を克服するために、お年寄りも若者も安心できる全世代型の社会保障制度への転換を訴えています。改革を行いながら、国民皆保険をはじめとする社会保障をしっかりと次の世代に引き渡していくことは、今を生きるわれわれの責任です。

子供もお年寄りも障害や難病のある方も、全ての世代を通じて国民誰もが住み慣れた地域で暮らし、活躍するために必要なのは安心です。それを支えるのは地域の方々にも寄り添い、頼りにされる皆様のような「かかりつけ医」の存在です。

超高齢化社会の中で、医療に対する国民の関心や期待はますます高まっています。かかりつけ医を中心として、身近なところで医療・介護が切れ目なく提供される体制の構築に努めてまいります。

「日本医師会 赤ひげ大賞」がこれからもますます発展されること、そして、皆様方のますますのご活躍をお祈り申し上げまして、私の挨拶といたします。

日本医師会 会長

横倉 義武

本日ここに、ご関係の多くの皆様のご出席のもと、第6回「日本医師会 赤ひげ大賞」の表彰式を行わせていただきますことを心から感謝申し上げます。

「日本医師会 赤ひげ大賞」は、地域医療の現場で長年にわたり地域住民に寄り添い地道に尽力されている先生方を「現代の赤ひげ先生」に見立て、その功労を顕彰することを目的として、平成24年に創設したものです。

「赤ひげ大賞」という名称ですが、その由来は、山本周五郎^{やまもとしゅうごろう}の時代小説「赤ひげ診療譚^{しんりょうたん}」にあります。この「赤ひげ先生」の实在のモデルは、江戸中期に貧民救済施設である小石川養生所^{こいしかわようじょうしょ}で活躍した小川笙船^{おがわしやせん}と言われていますが、貧しく不幸な人々に寄り添い、身を粉にして働く頼もしい医師というイメージを思い起こす方も多いのではないのでしょうか。

6回目となる今回、大賞を受賞された5名の先生方は、いずれも各地域において、献身的に医療活動に従事され、患者さんの信頼も厚い方々ばかりであります。

更に今回は、選考委員の強いご希望を受け、東日本大震災後、自らも被災されながら、被災者の支援活動を続けてこられた2名の先生方に「選考委員特別賞」をお贈りすることといたしましたが、大賞受賞者の5名の先生方を始め、7名の先生方は、まさに「現代の赤ひげ先生」と言えます。

「人生100年時代」と言われる中で、明るい高齢社会としていくためにも、日頃からの健康管理が大変重要になっており、地域で働く医師達には、単に病を治療するだけでなく、その予防にまで携わることが求められるなど、期待される役割は多様化し、その重要性もますます高まるものと考えています。

全ての人が安心して暮らせるまちづくりのため、日本医師会といたしましても、地域の医師達へのバックアップに今後も全力で取り組んで参る所存でありますが、本日お集まりの皆様方にも、ぜひ、地域住民の方々に寄り添った形で医療を展開している全国の赤ひげ先生がますます活躍できますよう、なお一層のご支援・ご協力を賜りますことをお願い申し上げます。

また、本日は多くの医学生にも参加してもらっておりますが、ぜひ、受賞者の方々のお話を聞いて、地域医療に関わりたいという気持ちをより強めていって頂ければ幸いです。

結びになりますが、改めまして、共催の産経新聞社、ご後援の厚生労働省、フジテレビジョン、BSフジ、今回より特別協賛いただきました太陽生命保険株式会社を始め、本事業の実施にご尽力いただきました方々に、心より御礼申し上げ、ごあいさつとさせていただきます。

受賞者の先生方、本日は誠にありがとうございました。



産経新聞社
代表取締役社長

飯塚 浩彦



開式にあたり、一言ご挨拶申し上げます。本日は受賞者の皆様、ならびにご家族の皆様、誠にありがとうございます。

地域に密着し、住民の健康を長年支えてこられた医師の皆様を称えるこの「日本医師会 赤ひげ大賞」は今回、平成24年の創設から6回目の表彰式を迎えました。受賞者の皆様はどなたも、地域社会の信頼を得ながら、住民の健康な生活を支えてこられた方ばかりでございます。まさに「現代の赤ひげ先生」ですが、今回はこれまでで最高齢、90歳の「赤ひげ先生」もいらっしゃいます。

その藤巻幹夫先生にはまだ及びませんが、産経新聞は今年6月、創刊から85年を迎えます。この節目にあたり昨年、産経新聞社では「100歳時代プロジェクト」を立ち上げました。多くの人が100歳まで生きられる時代を迎え、一人ひとりの人生設計も、社会の仕組みも、大きな変化を求められています。

年齢を重ねてもいかに健康に、毎日を充実させて生きるか。われわれも様々な提言を行ってまいりたいと思いますが、申し上げるまでもなく、この健康な100歳時代を支えるのは、地域に深く根差した医療であり、その医療活動に携わる医師の皆様、医療関係者の皆様であります。今後とも皆様のご尽力を心よりお願いしたいと思います。

私ども産経新聞社も報道機関として、日本の医療の充実、さらには国民の長寿と健康的な生活の一助となるべく、これまで以上に邁進していく所存でございます。今後とも、皆様方の一層のご支援を賜りますようお願い申し上げます。

結びになりますが、今回から特別協賛をいただいております太陽生命保険株式会社様をはじめ、ご協力、ご尽力いただきました方々に、心より御礼申し上げ、私からのご挨拶と致します。本日は誠にありがとうございます。

太陽生命保険株式会社
代表取締役社長

田中 勝英



「日本医師会 赤ひげ大賞」および「選考委員特別賞」を受賞されました7名の皆様、本当におめでとうございます。

皆様が真摯に、そしてひたむきに地域医療に向き合われ、地域住民の方々が安心して日々の暮らしができるように心を砕かれてきたことに感銘を受けました。

このように地域の方々の生活や心の支えとしてなくてはならない医師の先生方に光を当て表彰する、この素晴らしい「日本医師会 赤ひげ大賞」に協賛させて頂くことになり、大変光栄に感じております。

私ども太陽生命は、「シニアのお客様に最もやさしい生命保険会社」「シニアNO.1」を掲げて、商品とサービスをご提供し、全国に営業拠点を展開しております。

日本の国は、今後ますます高齢化が進み、ご高齢者だけの世帯も増えてまいります。このような超高齢社会「人生100歳時代」においては、病気にならずに元気に長生きすることが一番大切です。そのためには、地域医療を支える皆様の役割がさらに重要かつ大きなものとなってまいります。

今後とも地域の方々にとってなくてはならない心の支えとしてご活躍いただきたいと思います。

それでは、受賞者の皆様、主催の日本医師会および産経新聞社のご関係者の皆様、またご出席の皆様の今後益々のご活躍とご健勝を心より祈念申し上げてご挨拶とさせていただきます。

本日は誠にありがとうございました。

厚生労働大臣

加藤 勝信



本日は、栄えある第6回「日本医師会 赤ひげ大賞」を受賞された5名及び選考委員特別賞を受賞された2名の皆様に対し、心からお祝いを申し上げますとともに、地域医療の現場で、長年にわたり貢献してこられた皆様の活動に、深く敬意を表します。

受賞者の皆様におかれましては、住民が安心して生活を送れるよう、それぞれの地域医療の現場で、地域に寄り添いながら、日夜取り組んでいただいていると伺っています。

新潟県の過疎高齢化が進む豪雪地帯において、40年以上にわたり住民の健康管理に尽力されてきた藤巻幹夫さま、地域唯一の救急告示診療所として、静岡県で長年救急医療に尽力されてきた河井文健さま、岡山県で住み慣れた地域での看取りに力を入れるほか、地域の高齢者の生活支援にも取り組まれてきた塚本眞言さま、生活習慣病予防の重要性を訴え、子どもへの対策に取り組み、その取組を香川県の全県下に根付かせた松原奎一さま、佐賀県の高齢化率が40%を超える山間地域において、かかりつけ医として住民を支えてこられた水上忠弘さま、宮城県南三陸町において、東日本大震災の際には災害医療に尽力され、現在も医療提供環境の整備に取り組まれている鎌田真人さま、佐藤徹さまと、それぞれの地域で献身的、継続的な活動をされてきたことに、改めて深く敬意を表します。

今、地域医療に求められているのは、単に病気を「治す」ことだけではありません。地域の皆様が健康面で安心して暮らせるよう、多様な人生観、価値観を有する患者の相談に応じ、患者本人だけでなく、ときにはその家族全員のことまで考えに入れて、その方の地域での生活を支える、いわば「治し、支える」医療です。

本日、赤ひげ大賞を受賞された皆様は、まさにそれを現場で実践されている「かかりつけ医」としての理想的な姿を示されていると言えます。

現在、厚生労働省では、団塊の世代が75歳以上となる2025年を目途として、介護が必要な状態となっても、住み慣れた地域で自分らしい暮らしを人生の最期まで続けることができるよう、住まい・医療・介護・予防・生活支援が一体的に提供される地域包括ケアシステムの構築を目指しています。

その実現のためにも、「赤ひげ先生」として、地域の第一線で活躍される皆様のお力添えが不可欠です。引き続きのご理解とご協力をお願いします。

最後に、受賞者の皆様が今回のご受賞を契機としてさらに地域においてご活躍されること、また本日お集まりの皆様のますますのご健勝を祈念して、私の挨拶といたします。

新潟県医師会 会長

渡部 透



受賞者の所属都道府県医師会代表として、一言ごあいさつ申し上げます。受賞された皆さま、誠におめでとうございます。受賞者の所属医師会といたしましても、非常に誇らしくも名誉なことと存じます。

受賞された先生方は強い信念の下、地域医療に貢献し、長年にわたりご活躍なさっておられます。ご貢献に地元医師会として感謝申し上げます。地域医療にはさまざまな状況があり、課題も多くあります。本日、皆さまが各地域で献身的に従事されているお話を伺いますと、いろいろな地域医療の姿が浮かび上がり、そのご苦労は筆舌に尽くしがたいことがあったと感じました。

選考委員特別賞受賞の鎌田先生と佐藤先生は、震災でご自身の診療所も全壊するという状況の中で、翌日には診療を開始されて、復興の過程におきましても地元にも多大なご支援をされています。新潟県も平成16年の中部地震、19年の中部沖地震で甚大な被害を受けましたが、東日本大震災の被害はその何十倍も大きなものでした。私たちも日本医師会の災害医療チーム（JMAT）として、被災地支援に参りましたが、想像を絶する被害状況でありました。その中でのご活躍には、頭の下がる思いが致します。

これからも、受賞された先生方にはご健勝でご活躍いただきたいと思います。そして、後進の医師に対しても、ご指導いただければと願っております。

私たち医師会は、後進の医師や住民の皆さんに対し先生方の「医」の心を語り継ぐ責務があると思っています。このことを肝に銘じまして、これからも医師会活動に努めていく所存ですので、何卒よろしくお願い申し上げます。

最後になりますが、主催されました日本医師会、産経新聞社様、ご後援されました厚生労働省様、フジテレビジョン様、BSフジ様、特別協賛の太陽生命保険株式会社様に御礼申し上げます。全国には黙々と地域医療に励んでいる先生がたくさんおられます。これからも多くの先生方に光を当てていただけるようお願い申し上げます、私のあいさつとさせていただきます。おめでとうございます。

豪雪地帯で患者に向き合う90歳医師

藤巻医院 理事

藤巻 幹夫

〔新潟県〕

ふじまき・みさお 新潟県小千谷市の藤巻医院理事。昭和2年、新潟県長岡市生まれ。昭和医学専門学校（現昭和大）を卒業後、東京鉄道病院（現JR東京総合病院）の産婦人科医として勤務した後、父、敏太郎さんが院長を務めていた藤巻医院で診療を始めた。市の予防接種を40年以上担当するとともに、学校医として子供の健康管理に努めている。



(春名中撮影)



患者から絶大な信頼を寄せられている

鮮やかな色彩や模様から「泳ぐ宝石」とも称賛されるニシキゴイの生産地としても知られる新潟県小千谷市。市街地から約15^{キロ}ほど離れ、冬には3^{メートル}を超える雪に覆われる同市真人町の信濃川沿いに藤巻医院は建つ。かつては住宅も兼ねていたという医院は、18世紀前半に建築されたとされ、趣のあるかやぶき屋根が特徴だ。

「薬はいつものを出しておきますからね」

藤巻幹夫医師がすらすらとカルテにペンを走らせながら、柔らかな笑顔で患者に語りかける。

90歳となった現在でも、ほぼ毎日、午前中は外来の患者を診察している。患者は生まれた当時から見続けてきた人ばかり。「先生は何歳になりましたか」。高血圧や糖尿病などの慢性疾患を抱える患者も多いが、診察室は常に和やかな雰囲気包まれている。

昭和40年代から診てもらっているという地元の70代の男性は、「本当に気さくな先生。何を相談してもかしこまったことを言わず答えてくれる。大病院に行くよりも頼りになる先生で、ずっと元気でいてほしい」と絶大な信頼を寄せる。

外来の診察を終えると、休憩をはさみ往診の準備をする。「じゃあ行こうか」。午後2時過ぎ、看護師を引き連れ、さっそうと車に乗り込み、往診先へ向かう。訪問先に到着し、玄関へ向かう足取りは軽快だ。

往診先は20年以上診察している70歳以上の高齢者がほとんど。「足は痛くないかい」「何時に食事したの」などと柔和な表情でゆっくりと語りかけると、つらそうだった患者の顔に自然と笑みが浮かぶ。

101歳の患者には「顔色良くなってるよ。脈拍も

いいし、今日は天気もいい。ごはんを食べて一日でも長生きしてください」と元気づけ、「もう生きるのが嫌になるよ」と弱音を吐く80代の患者に対しては「あんまり早く逝くなや。あなたより私の方が早くいなくなるかもしれないのに」と冗談も交え、笑いを誘う。

真人地区は小千谷市内で特に高齢化、過疎化が進んでいる地域の一つでもある。医院まで足を運ぶことが難しい高齢者も多く、藤巻医師は現在でも現役の医師として週3回は往診に出向く。「今は車で往診に行けるから楽ですよ」と、笑顔を見せる。

中越地震で奔走

新潟県長岡市の出身。先の大戦の混乱のさなか、開業医の父、敏太郎さんの背中を追いかけて、医師を目指すことを決めた。産婦人科医として6年ほど勤務した後、地元に戻り、敏太郎さんが院長を務めていた藤巻医院で診療を開始した。

県医師会の代議員を8年、同市北魚沼郡医師会の役員を22年と長年務め、地域医療の発展に大きく貢献してきた。後進の育成にも積極的で、多くの医師からも頼りにされている。

昭和34年に藤巻医院で医師として勤務を始めた当初、往診の担当だった。当時は道路状況も悪く、除雪されていない未舗装の道路を7、8時間かけて歩き、往診先に出向くこともあったという。

冬は大きなリュックにカンジキを結びつけ、ライトを備え付けたスキー用帽子をかぶり、長靴をはいての往診だった。

外来の患者は敏太郎さんに任せ、雪深い山地をこの姿で一日かけて歩き回り、15件ほどの家庭を毎日訪問した。終えるのは翌朝の5時ごろになることもあった。休む暇もなく、すぐに12、13^{キロ}離れた隣接地区に往診に出向いていた。「まるでむじなのようにさまよっていましたよ」

90年にわたる長い人生の中で、強烈に脳裏に焼き付いているのが、平成16年10月に発生した



真剣な表情でカルテにペンを走らせる



「よし大丈夫だ」。笑顔で語りかけると患者の表情も和らぐ



患者は小さいころから診てきた高齢者が多い



18世紀後半に建てられたとされる藤巻医院



90歳になった今でも週3回の往診を続ける

新潟県中越地震だ。68人が死亡、約4800人が重軽傷を負い、震度7を記録した小千谷市も大きな被害を受けた。地震発生の瞬間、玄関でくつを磨いていた。「爆弾が落ちたと思った。本棚は倒れ、ガラスの破片が散乱していた」と、当時の様子を振り返る。

大地震で被害も甚大と知るやいなや、「できる限りのことはしてあげなくてはならない」と、すぐに避難所に臨時診療室を開設。自身も体調を崩していたが、損壊した医院の建物の中から応急処置を行う薬剤を持ち出し、支援の医療チームが到着するまで夜通し、診察を続けた。

避難所まで移動できない患者のもとには、自らハンドルを握って往診へ向かった。「山奥の集落をひたすら回り、行ったことがない家がないくらいでした」

いつも明るい笑顔で

患者を診察する際に心がけているのは、とにかく笑顔で接すること。「明るい世の中で生活することが一番大事。明るい世の中を作るには自分で明るくならなくては。面白くない顔をするのが一番悪い。どんな状況でも嫌な顔はしないことです」。明るい笑顔でそう語る。医師として一番喜びを感じるのは、出産の瞬間だ。「私はもとも産婦人科医なので、子供が生まれて、元気な顔を見るのが一番うれしい」と、顔をほころばせる。

「赤ちゃんのころから診察していた人が、おじいさん、おばあさんになった今でも来てくれているのは、少し不思議だね」と語る。藤巻医師に診察してもらわなければ気が済まないという患者も多く、いつも「先生の顔を見るだけで安心して元気になる」



できる限り医師を続ける覚悟だ

「先生がいなくなると寂しい」と声を掛けられているという。長年にわたって地域住民から深い信頼を寄せられ、医療とは関係のない、家族の相談を受けることも多い。

元気の秘訣は、大好きなお酒を飲むことと、一緒に暮らす孫たちと遊ぶことで、「孫とはたまに相撲をとることもありますよ」という。

「いつまで生きられるか分らないですが、他にやることもないですし、続けられる限りは医者をつと続けていきたい」。まっすぐに前を見つめ、そう力を込めた。

(松崎翼)

救急医療を担うまちの頼もしい番人

河井医院 理事長・院長

河井 文健

〔 静岡県 〕

かわい・ふみたけ 静岡県下田市の河井医院理事長・院長。昭和15年、下田市生まれ。77歳。東京医科大医学部卒。東京女子医科大消化器病センター、東京都立豊島病院を経て、平成3年に郷里に戻り両親が経営していた河井医院を継ぐ。24年までは同市内唯一の救急対応医療機関であり、現在も夜間や休日の救急受け入れを積極的に行っている。



(宮川浩和撮影)



往診先では家族のように患者に接する

「調子はどうだい」。うらかな午後のひととき、河井文健医師は聴診器をかけて民家の玄関をくぐり、家族のようにベッドの脇にひざまずくと、94歳の患者さんに話しかけた。

患者さんが「先生、今日は足がむくんでねえ」と訴えると、「そうかい、じゃあ少しマッサージしようか」と、しばらく足を優しくさする。熱を測り左手の包帯を取り換え、「次に来るときはインフルエンザの予防接種をするからね」と柔和な笑顔を向けた。

患者さんと河井医院とは、先代のころからざっと70年近い付き合いになる。「もう親戚みたいなもんだな」と河井医師。患者さんの長男(66)は「先代からずっと家族ぐるみで診てもらっている。今はほとんどの先生が往診しないので、ありがたいことです」と感謝する。

午後2時過ぎ、15分ほどで往診を終えて伊豆急行下田駅から徒歩5分の河井医院に戻ると、待合

室は順番待ちの高齢者であふれていた。河井医師は慌てず騒がず、一人ずつ診察室に呼んで丁寧に患者の話に耳を傾け、必要な処置を施していく。

白衣は好まず、年中半ズボン。ハワイ好きが高じて、夏場にはアロハシャツも着る。経過観察のため来院した70年来の友人という沢村紀一郎さん(77)は、「どんな人にも分け隔てなく接して、面倒がらずに一生懸命考えてくれる医者ですよ」と最大級の賛辞を送った。

そんなとき、診察室の緊急電話が鳴った。ウナギの骨をのどに刺してしまった中国人観光客の受け入れ先が見つからないという。「いいよ、僕が診るよ。連れてきて」。即答だった。いつもそう。頼ってくる患者を診察しないまま断ることはない。

モットーは「何でも診る、誰でも診る」。下田は伊豆半島屈指の観光地という土地柄、夏は海水浴客、冬には避寒客が国内外から押し寄せる。言葉が不

自由な外国人、慣れない道で交通事故にあう若いカップル、魚に生息する寄生虫で食中毒を起こした親子連れ、海水浴中に釣り針を手足に刺してしまう子供たち…。どんな患者も、まずは診る。

その姿は、下田で暮らし、生涯をこの地で地域医療にささげた両親の姿と重なる。父は外科医、母は耳鼻科医。「父は静岡県内で初めて、いわゆるドクターヘリに乗り込んだ医者なんです」と誇らしげだ。

365日24時間の急患対応

「地元の人とは地元で診る」という両親の意志を守るべく、50歳だった平成3年に下田に戻って父の医院を継いだ。その5年後に下田への移住を決意してくれた妻で小児科医の栄さん(74)の協力もあり、つい数年前まで、昼夜を問わず365日、急患に対応

してきた。

今でも鮮明に覚えているのは、下田に戻ってから1年が過ぎた4年の夏。大きな事件や事故が極めて少ない穏やかなこの街で、立て続けに重大交通事故が発生した。

7歳の小学生が交通事故にあい肝臓破裂を起こした数日後、今度は植木職人が軽トラックと塀の間に挟まれて内臓破裂でショック状態になってしまった。たまたま下田に来ていた栄さんが麻酔を、河井医師が開腹手術を担当し、夫婦の連係プレーで患者は2人とも一命を取りとめた。

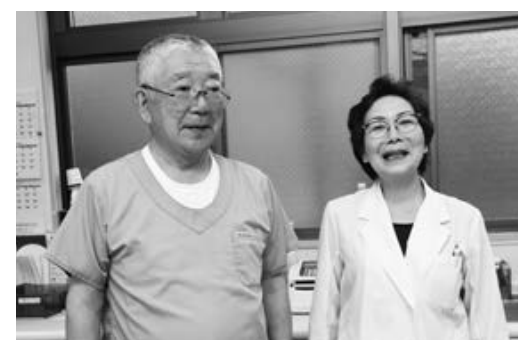
50～60代のうちは、がむしゃらに働いた。朝はサラリーマンが通勤前に受診できるよう午前6時から内視鏡検査や胃カメラ検査を行い、9時から外来の診療を開始。ほぼ毎日病院に“当直”しているので、診察室に出勤するまで1分とかからない。



忙しい診察の合間にスタッフと打ち合わせ



患者の訴えには真剣に耳を傾ける



小児科医の妻、栄さんと二人三脚で



患者をリラックスさせる光あふれる待合室



時には資料を取り出して丁寧に説明する

毎日のように不調を訴えて来院するお年寄りの話を聞き、観光客に薬を処方し、昼休みには往診に駆け付ける。時には救急車で運ばれてくる急患を受け入れたり、車で1時間半ほどかかる第3次救急病院への搬送を指示したりしながら、1日に120～200人を診察する。

夕食後はそのまま“当直勤務”。夜中に扉をたたく近所の患者や、搬送されてくる急患に対応し、仮眠を取っては起こされる。そして翌朝5時半に目を覚まし、また診察室へ。そんな日々を「まるで野戦病院のようでした」と懐かしそうに振り返った。



「医師不足は深刻」と下田の地域医療の行く末を憂える

平成24年に市内に待望の第2次救急病院が開業し、夜間や休日の負担はかなり減った。年齢には逆らえず、かつてのような昼夜を問わない診療はもうできない。それでもいまだに患者には携帯電話番号を記したカードを渡し、連絡があればすぐに対応する。

「趣味は医者、毎日が楽しい」

年間約200万人以上が訪れる一大観光地であるながら、伊豆半島南端の陸の孤島で高齢化率は約40%、人口当たりの医師数は全国平均の7割という医療過疎地の下田。この地で20年以上の長きにわたり、困ったときの駆け込み寺であり、“最後の砦”であり続けている。

そんな毎日を、「仕事が楽しくてしょうがない。私の仕事は医者ですが、趣味までも医者になってしまいました」と豪快に笑い飛ばす。「今後何年間“趣味”ができるか分かりませんが、体力と気力のある限り続けたい」と、さらなる意欲は十分。取材の翌日には記者に「顔色が悪かったけれど気になるところはない?」と電話をかけてくれるような、人情派の町医者だ。

唯一の気がかりは、全身全霊で守り続けた下田の医療の行く末。いったんは他の学部に進学しながら医学部を再受験した長男の健太郎さん(43)は、都内で救急医として働いている。

「長男には自由にさせます。戻ってこいとは言いません」と、「後継者に」と望む周囲の期待を受け流すが、その口ぶりからは、自らが郷里に戻った年齢に近づいた長男に寄せる厚い信頼が感じられた。

(田中万紀)

住民主体の組織を立ち上げ、地域に寄り添う医療を展開

塚本内科医院 理事長・院長

塚本 眞言

〔岡山県〕

つかもと・まこと 岡山県吉備中央町の塚本内科医院理事長・院長。昭和25年、岡山市生まれ、67歳。川崎医科大学大学院修了。同大付属病院内科副医長などを経て昭和63年、父親が開業した塚本内科医院を継承。県内の医療機関では初の介護タクシー事業を開始。高齢者らを地域で支える「円城安心ネット」の立ち上げに尽力するなど、患者に寄り添う地域医療を進めている。



(志儀駒貴・中島久仁子撮影)



患者への声かけは温かい

「歩いてもらうのはええけど、転ばんようにしてえよ」「焼酎は、ほどほどにな」。柔らかな口調で声をかけ、笑い合う姿に、医者と患者の距離はなく、診察室は温かな雰囲気包まれる。

岡山県の中央、吉備中央町は、農業を中心とした高原地帯。医院がある円城地域は、人口が約1300人。うち65歳以上の高齢者は半数近くに上り、限界集落も点在するなど、過疎高齢化が進む中山間地域だ。内科副医長として勤務していた大学付属病院を辞め、父親が開業した医院を継承したのが昭和63年。幼少期から育ったこの地で、地域医療に邁進して4月で丸30年を迎える。

父の代からの患者は、皆顔なじみ。家族構成も家庭環境もよく分かる。「イサオさん（息子）は、よう帰ってくるん?」「インコは今、何羽おるん?」患者の日常に

寄り添う会話が弾む。手元の手書きカルテには、最近、耳の聞こえが悪く補聴器を新しくしたことなど、多くのメモ書きも加えられ、診察に役立てている。

父の代に20代だった患者は今では80～90代の高齢者。戦時中や戦後の大変な時代を生きてきた人生の大先輩。敬意は、気持ちの根底にいつもあると言う。

商店がほとんどなく、公共交通機関もないこの地域で、通院が困難な患者の足の確保に、と平成17年、医療法人として県内初の介護タクシーを導入。19年には、自宅での生活が困難な患者が通所で介護サービスを受けられ、泊まりもできる小規模多機能施設「ユートピア円城」を医院に併設した。

住み慣れた地域で最期までと考える患者に、「少しでも安心して暮らしやすいようにサポートしたい」

一。塚本眞言医師の思いは、対話を主流にした日々の診察で培われ、患者のニーズに応じてきた。

家族を思うような気配りで

ある水曜日。午前の外来診療を終えると、午後は車で約10分、無医地区に設けたサテライト診療所に向かう。小学校跡地に建てられた公民館の一室が診察室だ。

到着するやいなや、83歳女性がしんどそうな様子で受診に訪れた。体調が悪い理由を聞くと、その日の朝、寒い中を1人で歩いて自販機まで、往復30分かけて、缶コーヒーを買いに行ったという。

すぐに心電図をとり、容体を診る。「救急車呼んで大きい病院に行くほどではないで」という塚本医師の言葉に、女性は安堵の表情を浮かべる。女性は

脳梗塞と心筋梗塞の既往歴があり、運動時には軽い息切れ状態になる。寒さも加わり、気分が悪くなったようだ。

「外には出ん方がええで。寒すぎる。甘酒や、しょうが湯みたいなあったかいものを飲んで安静にな」。診察を終えても、女性の自宅に湯を沸かすポットがあるか気になり、看護師に確認の指示を出す。家族を思うような気配りは、日常茶飯事だ。

数人の診察を終えると、休む間もなく2軒の訪問診療へ。どちらも険しい山道を登った先にあり、ハンドルを何度も切りかえて進むヘアピンカーブや、冷や汗を流しながらの狭い道もある。それでも通所が困難な高齢患者が待っている。

「本当にありがたい限り」。訪問先の1つ、98歳の義母を介護する女性（68）は、塚本医師の往診に感謝する。「このお嫁さんは、本当によう面倒をみ



集いの場を楽しむ高齢者ら



認知症カフェで話に熱心に耳を傾ける参加者たち



介護タクシーを利用して通院



地域全体が見渡せる医院の前で



「調子はどう?」と気軽に声をかける

てあげられる」。介護する家族へのねぎらいも、また温かい。

休診日の木曜日。円城地域の公民館の一室に、塚本医師の姿があった。持参したDVDで、風景映像とともに昭和の歌を紹介。集まった高齢者らが懐かしそうに口ずさむ。「この映像の景色に負けんぐらいの景色が円城地域にはあると思いますよ。『ここはええで』という場所があったら教えてください。写真撮りに行くから」と呼びかける。

平成26年、地域包括ケアシステムの先駆けとして発足した、高齢者らを支援する地域ボランティア組織「円城安心ネット」が月1回開く認知症カフェの1コマだ。立ち上げに尽力し、代表を務める塚本医師は「高齢者に集いの場を作ることで、横のつなが

りや地域での自分の存在価値を高め、生きる力になる」と話す。

公民館では認知症カフェばかりでなく、週1回、高齢者らが集い、地元食材を使った住民手作りランチを食べながらおしゃべりを楽しむ「ももカフェ」や健康体操教室も開催している。「みんな心待ちにしているようで出席率がいいですよ」と笑う。車の送迎やランチ作りは、すべて住民自らボランティアで行っているという。

元気なわれわれがお世話する気持ち

「円城地域のいい所は『困ったときはお互いさま』の精神が、住民みんなに根づいている所。元気な人らが地域の子供や高齢者、障害のある人を支えることが自然にでき、役に立っていることが、喜びに変わっている」と話す。

塚本医師が案内してくれた場所がある。地域が一望できる医院の北側だ。「町全体が病院で民家は全戸南向きの完全個室。元気なわれわれが、障害のある方や高齢になられた方をお世話するために長い廊下を通して、個室に寄せてもらっている。そういう感覚で医療や介護をやっているつもりなんですけどね」。条件が合えば、雲海も望めるという場所に立ち、思いを話してくれた。

小学生のころ、正月前に医者だった父親のバイクに乗り、一緒に往診に行った帰り際、「ありがとうございました」。涙ながらに深々と頭を下げる患者の家族の姿が焼き付いた。人から感謝される仕事の尊さを感じたあの時が、医者を目指した原点と振り返る。

「生まれ変わってもう一度医者になったら、やっぱりこの地域で、同じスタッフで医院をしたい」。そう言って、こぼれる笑顔を見せた。

患者に寄り添う気持ちは変わらない

(中島久仁子)



学校での血液検査を訴え、実現

松原病院 理事長

松原 奎一

〔香川県〕

まつばら・けいいち 香川県三木町の松原病院理事長。昭和17年、三木町生まれ。75歳。日本大医学部卒。同大附属板橋病院研修医、同大第二内科副手を経て、43年、父の後を継ぎ松原医院の院長に就任。以来約50年、大学病院および地域の診療所と連携し、地域住民の健康保持増進に努めている。地域の中学校校医として、学校で血液検査を実施するなど、学校保健活動にも精力的に取り組んでいる。



(岡本義彦撮影)



子供と接するときは自然と穏やかな表情に

香川県の東部に位置する三木町は、隣接する県庁所在地、高松市のベッドタウンとして利便性も良く、土地も広々として風光明媚。町内に小学、中学、高校、大学の国公立学校がそろっていることから、「文教の町」として子育て世代に人気が高い。生まれ故郷でもあるこの町で50年の長きにわたり、地域住民の健康保持増進に努める。

昭和43年、東京で研修中に父が急死。すぐに三木町へ戻り、25歳という若さで父の後を継ぎ、松原医院(現病院)の院長になった。

まだ研究したい気持ちもあり、徳島大医学部第二内科医員を兼任。徳島と香川を往復し、研究と診療に追われる日々が続いた。「20代は本当に大変だった」と懐かしそうに振り返り、「いつも周りの人が助けてくれた」と、感謝の気持ちを付け加える。

52年に三木中学の校医になった。生徒と接する中で、肥満傾向の子供が多いことや、病気で来院する子供の血液に異常値が多いことに気づき、学校での血液検査実施を町教育委員会に申し出たが、取り合ってもらえなかった。「生徒の健康は校医である自分の責任」と考え、62年から1年生約300人に対して自費で検査を始めた。

検査は授業を妨げないよう早朝に行った。空腹時の血糖値が必要なため、生徒には検査当日の朝食は取らずに登校させ、町で人気のパン屋から自費でサンドイッチと牛乳を購入し、採血後に生徒に食べさせた。採血と合わせて、食事や運動などについても細かくアンケートを取った。

数値に異常があれば、本人と保護者に望ましい食生活や運動について助言し、経過を注意深く

見守った。「異常値を発見して治療するのが真の目的ではない。自分の健康状態を知り、自己管理できるようになってほしい」と力を込める。

「学校現場での保健教育は、どちらかというと健康情報の教育であり、生活習慣病予防や自らの健康を守るために何をすべきか、という視点に欠けているのではないか。三木中学には町全域から生徒が通っているため、町民に対する保健教育にもなるのではないか」。教育関係者らを2年以上かけて説得し、4年目からは町教委が費用を負担することになった。

子供たちの健康を見守り続ける

これまで検査した生徒は約8000人に上る。長年の総合的な取り組みが高く評価されて、三木中学は平成23年度「21世紀・新しい時代の健康教育推進学校表彰」の「全国最優秀賞」に輝いた。提唱してきた学校での血液検査は、24年度からは小学4年生を対象に「小児生活習慣病予防検診」として、全県下で実施されている。

保護者だった50代の女性は「娘は痩せていたのに、コレステロールの値が高かった。家族に糖尿病の人がいたので、遺伝的なものがあるのかもしれないと思った」と話し、食事の内容に気をつけるようにしたという。同じく保護者だった60代の男性は「三木町に引っ越したばかりだったので、子供の血液検査があることに驚いた。ありがたかった」と振り返る。当時、県内から転居してき



笑顔と温かなまなざしで患者と接する

たが、学校での血液検査は聞いたことがなかったという。また自身が学校で血液検査を受けたという40代の女性は「数値的なことはあまり記憶にないが、検査後に学校で食べたサンドイッチが、ご褒美のようでうれしかったのを覚えている」と、懐かしそうに話した。

「最初に検査した子供たちが、すでに40歳を超えている。中学生だった子供らがどう成長し、自分の体をどのように管理しているのか確認したい」。そんな提案を受け、三木町では24年度から成人式で生活習慣病予防検診を実施している。振り袖姿での採血は難しく、帰省しない成人も多いことから、受診率はまだ決して高くない。

それでも、中学からわずか数年で、びっくりするく



児童デイサービスの子供たちからも慕われている



丁寧に触診と問診をする



ミーティングではスタッフの説明に耳を傾ける



患者の細かな変化も見逃さない

らい数値が悪くなっている成人もいるという。「家庭を離れた子供らをどうするか」「受診率を上げるにはどうするか」など課題は尽きない。「血液検査を記念品代わりにしても受診率を上げて、今の自分の健康を確認してほしい」。成人後、20代での検診が少ないことも心配でならない。

心配はそれだけではない。独り暮らしのお年寄りのフォロー、発達障害を持つ子供たちへの支援など、小さな町でも次々と課題は持ち上がる。そのたびに患者や行政、研究機関、地域の人たちと真

摯に向き合い、解決のために全力を尽くしてきた。その姿勢は、これからも変わらない。

300年続く医家に生まれて

実家は1700年代から続く医家。当然、医師になるだろうと周囲は思っていたようだが、当の本人は医師になるつもりはなかったという。「父親が毎日のように夜中に起こされて往診に出かける姿を見ていたからね。なのに、高校の担任の先生らに説得されて(笑)」と照れ隠しのように悪ぶるも、長男としての責任感と父への尊敬の念があったことは間違いない。

「鳥の声とともに起きよ」。父がよく口にしていた松原家の家訓の一つという。早朝から深夜まで、地域の人々の健康を見守り続けた父の姿と、自分なりの経験を踏まえ、「医者は一にも二にも在宅医療が重要」と言う。患者にとって、すぐに診てもらえる安心感こそが一番の治療だと考える。「夜に病院に来る人にも必ず何らかの事情がある。そこを感じ取ってあげないといけない」

自分の時間はいつも二の次で、常に地域の子供たちや大人たちのことを考え続けた50年。地域の人々から信頼される理由は、その地道な毎日の積み重ねにあるのだろう。

「地域の人たちの健康を守る手助けをすることが、この地で300年医療を通じてお世話になっている松原家の使命です」
(塩田真里)



ホームの入所者に笑顔で話しかける

住民の一生に関わる「かかりつけ医」

水上医院 理事長・院長

水上 忠弘

[佐賀県]

みずかみ・ただひろ 佐賀県伊万里市の水上医院理事長・院長。昭和19年、伊万里市生まれ。73歳。昭和大学医学部卒業、同大第2内科、三菱自動車工業川崎診療所での勤務を経て、58年から水上医院勤務。平成18～26年に伊万里・有田地区医師会会長を務め、現在顧問。地域のかかりつけ医として診療に励んでいる。



(永田直也撮影)



往診先では患者との会話を大切にする

季節が秋から冬に向かい、風が冷たさを増し始める中、水上医院の水上忠弘医師は、車が1台通るのがやっとの細道を通り、患者の自宅に向かった。

「元気な顔は見たかったんよ」。心臓に疾患のある100歳の女性にゆっくりと話しかけると、女性ははつらつとした表情で応じた。「先生のおかげで長生きしとるよ。110歳までいこう」

長崎県との県境に位置する佐賀県伊万里市山代町。海と山に囲まれた場所に、水上医院はある。かつては炭鉱や造船で栄えたが、人口減少が続く、医院のある山代町西部地区の高齢化率は40.7%になった。小学校では10人いない学年もある。

患者の家族も知る

かかりつけ医として34年間、診療を続けてきた。

午前中に外来診療を行い、週2回、看護師とともに3、4世帯の患者宅に足を運ぶ。高血圧の男性や足の不自由な女性。「病院まで歩ききらん。来てもらうけん助かるとたい」。患者は皆、安堵の表情を見せる。

ただ、訪問診療は決して楽ではない。都会のように住宅は密集せず、山あいに点在する家の移動は効率も悪い。認知症の高齢者も多く、自分の便を団子のように丸めて、室内に置いている人もいる。

それでも診察に向かう表情は明るい。「大変だと思えばストレスがかかるが、田舎の医師として当たり前のことをしているだけ。どんな患者でも、命を預かっているのだから、行かないわけにはいかない。置かれた便を見ると、今日も調子が良さそうだったと思う」と笑い飛ばす。

長年の付き合いや地域の学校医も務めた経験から、患者の人物や家族の状況もよく分かる。家族構成や生い立ちなど背景を知れば、より良い診療につ

ながる。

昼間の診療時に、頭がふらつくと訴えた80代の男性がいた。男性は元校長。1人暮らしで、人を頼ろうとしない性格だった。夜になり、気になって電話をしたが出ない。家に向かったところ、土間に倒れているのを発見し、命を救うことができた。

別の高齢者が徘徊で行方不明になった際は、「娘さんの家の近くにいるんじゃないか」とピンときた。向かったところ、無事、保護することができたという。

医院が終の棲家

昭和大を卒業し、同大などでの勤務を経て、父が開業した医院を受け継いだ。

19床のベッドは高齢者で満床。年間数人は病室で亡くなる。「最期は医院で死なせてほしい」と口にする人も多く、医院が終の棲家になっている。

「患者が一番望んでいるのは、孤独死をしたくないということ。医院は地域の人たちも立ち寄り、家にいるより寂しくない。住み慣れた家で暮らすのがいいと言われるが、自分が死んでいるのを誰か見つけてくれるだろうかという不安は大きい」と語る。

高齢者が不安を抱かずに自宅で生活が続ける。その一助となるよう、医院を経営しながら、日中の居場所となるデイサービス施設や、小規模多機能施設も開設した。

「入院中の高齢者を寝たきりにさせておくのが嫌」。そう思い、院内に本格的なリハビリ室も設け、地域に無償で開放した。

整備費は医院の積み立てや借金で工面した。「これが必要、これがないと困ると無心にやってきた。もうけはないけれど、とんとんでやっている。贅

沢をしなければ、何とか経営はやってこれた。女房のやりくりがうまかった」と、妻、広子さん(70)への感謝を口にする。

訪問診療にも工夫が詰まっている。薬の飲み忘れないよう、日付を書いたボードに、一つ一つ薬を張り付ける。認知症の男性には、思い出話をしながら、記憶を引き出す。

「日々、みんなと一緒に歩んでいる感じです。医師として先頭に立って、最後尾まで落ちこぼれないようにしたい」。独居や高齢夫婦世帯は、こうした医師がいなければ、安心して暮らすことができない。

73歳。患者の暮らしを見据え、体が動く限り取り組むつもりだ。受賞については、「看護師や他の病



患者の不安に寄り添う



施設に高齢者の笑い声が響く

院の医師を含め、地域みんなの助けがあったからやってこられた。代表として受け取りたい」と語った。

看護師は7人。病室で患者が亡くなると、当直以外でも駆けつけ、対応する。医院だけで問題を解決できない場合は、他の病院も頼ってきた。

スタッフや地域が一丸となり、治療、看護、介護、看取りと全過程に深く関わる。こうした連携は国や自治体が推進する「地域包括ケアシステム」そのもので、水上医院が核となっている。

「制度を守ることを優先するのではなく、地域の人たちに合った対応をするのが地域医療でしょう。点在する家に何十分もかけておむつを替えに行くのは時間をもったいない。むしろ、1カ所に集まってもらった方が効率がいいこともある」と指摘する。

周辺住民の名前は8、9割は分かる。亡くなった人の法事に呼ばれることもある。「あのとき間に合わな

かったもんね」と心の中で謝ったり、「楽しかったね」と故人と心の会話を交わす。「信頼してくれていたのも、誰よりも私のことを待っていてくれる気がするんですよ」

看護師長の塚原いつ子さん(62)は「患者さんの中には、家庭の悩みを相談する方もいらっしゃいます。『先生、時間が長いです』と思うくらい、患者さんが納得されるまでお話しされています」と語る。

向き合っているのは高齢者ばかりではない。地元の山代西小学校には、年間数十冊の本を寄贈する。子供たちからは「水上文庫」と親しまれ、感想を記したお礼の手紙が届く。

慌ただしい生活の中で、唯一の気分転換は夜の酒。市外から来客があれば、手厚くもてなす。昼も夜も、人を思う気持ちは変わらない。

(高瀬真由子)



看護師たちとも密に連携する



本を送った子供たちからお礼の手紙が届く



地域に根ざす水上医院



地域に何が必要か、常に考えている

震災の経験を基に新たな診療体制の確立に努める

歌津八番クリニック 理事長・院長

鎌田 真人 [宮城県]

かまだ・まさと 宮城県南三陸町の歌津八番クリニック理事長・院長。昭和33年、岩手県二戸市生まれ。60歳。近畿大医学部卒業。平成7年に父の医院を継承。23年に震災の津波で被災したが同年に再開。



「俺がやらなきゃ誰がやる」と南三陸に留まり、医療に従事する覚悟を語る、白衣にスニーカーの伊達男。「往診が多いから」がスニーカーを愛用する理由だ。目指すは「若い頃の森繁久彌」と朗らかに笑う。

代々医師の家系。平成7年、父の死去に伴い医院を継承した。「当時、本当はそんなに来たくなかった。継いだのは成行きです」と振り返る。

真っ黒な波が町を飲み込んだ23年の東日本大

震災。避難の際、とっさに持ち出した往診カバンが役に立った。「避難所で地域の人々に出会い、がぜんやる気が出てきた。『ここに医者がいるぞ』と」。

比較的高台にあった薬局が無事だと分かり、隣の整骨院を借りて臨時の診療所を設置。現在まで、そこに医院を構える。当時は不眠などの症状を訴える被災者が多かった。「家族が亡くなった人もいる。事情は深く聞けない」。努めて明るく接し、被災者に寄り添うことを心がけた。

気をつけているのは、常に気さくでいること。患者にはなるべく方言で話しかける。「医者はある意味、コミュニケーション・ビジネス。関西で働いているときは関西弁。その方が壁ができない」と言う。

週に4日程度は、車で高齢者宅へ往診に向かう。「父の代からのなじみの人もいて、みんな高齢化している。肉や卵を食べ、身体を動かし、全員100歳まで元気でいてほしい」と力強く語った。 (林修太郎)



(宮川浩和撮影)

被災地支える「まちのお医者さん」

佐藤徹内科クリニック 理事長・院長

佐藤 徹 [宮城県]

さとう・とおる 宮城県南三陸町の佐藤徹内科クリニック理事長・院長。昭和33年、秋田市生まれ。59歳。秋田大医学部卒業。平成12年に開業。23年に震災の津波で被災したが24年に再建。



被災地の地域医療を支える“町のお医者さん”だ。「今日注射する?」と怖がる子供の患者に「うん、頑張ろうね」と優しく励ます。受賞の一報を受け、「被災し、頑張っている先生が東北各地にいて選んでいただいたのは光栄です」と喜びを語った。

南三陸町には昭和63年に赴任。豊かな自然と活気ある土地柄にひかれた。

平成23年の東日本大震災では、南三陸町に開設した自院で診察中に揺れを感じ、すぐに患者を帰した。津波警報を聞いて、自らも避難。避難先で診療所が流されるのを見た。「これで終わった」。そう感じた。

わずかな医療器具と医薬品を手に避難所を巡回した。被災者の診療に従事する傍ら、犠牲者の遺体の検案も行った。波が引いて変わり果てた町を歩くと、よく知っている人が路上で裸のまま亡くなっているのを見た。まさに筆舌に尽くしがたい光景だった。

震災後は南三陸町を離れたが、所用で戻るたびに町民から

「またやってよ」「帰ってきてよ」と声をかけられた。別の病院で働いていたが、「ここは僕のいる場所ではないかも」と思い始めていた。翌24年1月、町の高台に移転し、診療を再開した。

「被災地医療に携わっている」という力みはないという。「震災直後はそう意識することもありました。私も被災者ですが、現在は震災前と意識に変化はない。南三陸はのんびりしていて、自分のスタイルに合っている気がします」とほほえんだ。(林修太郎)



(宮川浩和撮影)

日本医師会 常任理事

道永 麻里



受賞者の皆様、おめでとうございます。

第6回「日本医師会 赤ひげ大賞」の選考経過のご報告並びに講評を述べさせていただきます。

第6回「日本医師会 赤ひげ大賞」の選考につきましては、昨年5月16日、日本医師会より都道府県医師会宛てに推薦依頼文書をお送りし、26の医師会から総勢31名のご推薦をいただきました。

選考に当たりましては、先ほどご紹介のありました9名の選考委員で審査を行い、その結果を基に、10月6日、日本医師会館で選考会を開催させていただきました。

その後、11月22日に、今回の結果を公表し、本日の表彰式を迎えるに至りました。

引き続き、選考の講評を述べさせていただきます。

各都道府県医師会よりご推薦をいただきました31名の先生方は全て、本賞に値する素晴らしい活動を地域で続けてこられた方々ばかりであり、選考には困難を伴いましたが、その中で特に選考委員の目を引きつけたのが、今回、大賞を受賞されました5名の先生方でありました。

過疎高齢化が進む中山間地域の特別豪雪地帯という厳しい環境の中で、昭和34年から現在に至るまで住民の健康保持に尽力されている新潟県の藤巻幹夫先生、地域唯一の救急告示診療所として25年間昼夜を問わず救急医療に取り組んでこられた静岡県の河井文健先生、住み慣れた地域での看取りに力を入れるとともに、高齢者の生活支援も行っている岡山県の塚本眞言先生、学校医として自費で血液検査を行うなど次世代を担う児童・生徒の生活習慣病予防に尽力された香川県の松原奎一先生、34年間かかりつけ医として24時間体制で診療や往診を行い、住民の治療から看取りまでかわり続けておられる佐賀県の水上忠弘先生。

先生方は、病気だけではなく、患者さんやそのご家族が暮らしている地域まで診ておられ、まさに医療でまちづくりを実践する現代の赤ひげ先生の心意気に大変感動いたしました。

また、先ほど横倉会長のあいさつにもありましたが、「未曾有の被害をもたらした東日本大震災の復興は未だ道半ばである現状を忘れてはならない」との選考委員の強い思いから、震災の際に自らも被災されながら、被災者の治療に当たられた宮城県の鎌田眞人先生と佐藤徹先生のお二人には今回のみの特例として「選考委員特別賞」を贈り、その活動を顕彰することといたしました。

本賞が、地域医療に従事する先生方の励みとなり、地域医療の充実へとつながることを願っております。

ありがとうございました。

平成30年度

第7回「日本医師会 赤ひげ大賞」

● 推薦概要 ●

日本医師会

赤ひげ大賞

主 催	日本医師会、産経新聞社
後 援	厚生労働省、フジテレビジョン、BSフジ
特別協賛	太陽生命保険株式会社
対 象 者	病を診るだけではなく、地域に根付き、その地域のかかりつけ医として、生命の誕生から看取りまで、さまざまな場面で住民の疾病予防や健康の保持増進に努めている医師。日本医師会の会員及び都道府県医師会の会員で現役の医師（ただし、現職の日医・都道府県医師会役員は除く）。
推薦方法	本賞受賞にふさわしいと思われる方（原則1名以上2名以内）を各都道府県医師会長が推薦
受賞発表	産経新聞紙上
選 考	日本医師会と産経新聞社の主催者側委員に第三者を交えた選考委員会において選定
賞状と副賞	賞状、記念盾および賞金

世の中の課題に、保険で応えたい。



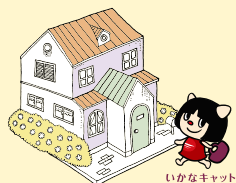
認知症に、太陽を。

世の中にいま、いちばん必要なものは何か。そう考え続ける太陽生命の答えのひとつが、ひまわり認知症治療保険です。太陽生命は、創業以来、時代の変化を先取りして、ご家庭のお客様のニーズに合った最先端の保険商品をご提供してまいりました。認知症に前向きに向き合い、健康な老後をお送りいただくための保険。太陽生命はこれからもご家庭に寄り添って歩んでまいります。

ひまわり認知症治療保険



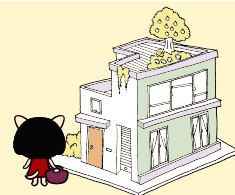
ひまわり認知症治療保険は、生まれて初めて所定の認知症に該当し、当社所定の状態が180日続いたときに一時金をお受取りいただけます。
ひまわり認知症治療保険に関する詳細は「商品パンフレット」「契約概要(設計書)」等を必ずご覧ください。



かけつけ隊
におまかせください。

お支払い手続きその場でサポート!

お支払い手続きの専門知識がある職員がシニアのお客様のもとへ直接訪問し、お手続きのサポートをいたします。



[資料のご請求・お問い合わせは] お客様サービスセンター

営業時間: 月~金 9時~18時 / 土・日 9時~17時 ※祝日・年末年始(12/30~1/4)は休業します

な っ と く コ ー ル
0120-709-506 (通話無料)

<http://www.taiyo-seimei.co.jp/>

太陽生命 検索